

12月



平成26年11月28日(金)発行

## 基礎・基本に忠実

校長 油井 宏樹

冬の寒さをひときわ感じる季節になりました。今学期も残すところひと月足らずになりました。2学期は運動会から始まり、歯と口の健康づくり公開研究会、マラソン大会、大海っ子フェスティバルなど全校あげての行事がたくさんありました。一つ一つの行事の中で、子どもたちの頑張る姿や笑顔をたくさん見ることができました。子どもたちは様々な活動を通して、協力すること、思いやりや感謝の気持ちなど、大切なことを多く学び、一段と大きく成長したのではないかと思います。

話は変わりますが、徳島県には池田高校という高校があります。高校野球で全国優勝3回、準優勝2回の偉業を成し遂げた学校です。監督は、鳴 文也 (つた ふみや) という今までの高校野球のスタイルを変える人物でした。「攻めダルマ」というあだ名をつけられ、とにかく厳しい練習で有名でした。部員は、練習についていけず一人二人と辞めていき、とうとう11人だけになったこともあります。1974年春の甲子園では、その部員11人だけで戦い抜き準優勝を果たしました。「さわやかイレブン」という言葉が生まれ、一躍有名になりました。プロ野球の選手もたくさん輩出しています。その監督が書いた本『攻めダルマの教育論』の一部を載せます。

「これまでの私のツタない野球人生をふりかえると、反省させられることがいろいろある。その中でもとりわけ忘れられないことの一つが、徳商時代のことだ。当時の稻原先生の野球指導は、これまでにも書いてきたように、本当にきびしかったが、私たちは時々練習で手を抜いた。練習場は、職員室から見えないところにあった。だから、先生がいないときは見張りを立て、サボって樂をする。先生が来ると「オーオー」と大きな声を出して、一生懸命練習をしているふりをした。私がいたとき、徳商は三度甲子園に出たが、三度とも、何でもないときにエラーをして負けた。練習の時にお性根を入れなかつたことが、そういう大事な場面になって出てきたのであろう。徳商時代、稻原先生に平凡の非凡という言葉を教えてもらった。野球技術などというが、基本練習は同じことの繰り返しで、つまらないことが多い。丸いボールとバットで毎日同じことをやるのだから、つまらんといえば、これほどつまらないものはない。ただ、その場合に、お性根を入れてやるかどうかで差がついてくる。平凡なことでも、毎日繰り返しやっていると、非凡につながっていく。たとえば、夜寝る前に歯をみがく。何でもないことだが、これを毎晩続ければ虫歯にならない。これが「平凡の非凡ぞ」、と先生はよく話をしていた。派手な技に走るより、一見つまらない基本練習やトレーニングをコツコツ積み上げることが大事だ。なんでも、お性根を入れてやることが大切だ。だから、体育の授業を適当に手を抜いて、野球の練習のときだけ一生懸命するという部員がいたら、私は怒鳴りつける。これは基本に忠実でないということになるからだ。「平凡の非凡～平凡なことでも繰り返し続けていけば非凡になる」人生のトレーニングは基本に忠実でなければいけない。基本に忠実な若者は必ずグーンと伸びるときがくる。」

(以上抜粋)

勉強でもスポーツでも何事も基礎基本の繰り返しがとても大事です。人が見ていようが見ていまいが、基礎基本を忠実に守り、性根を入れて行動しましょう。最後に笑うのは、基礎基本を身に付けた「あなた」です。